

4. 椎名麟三と姫路

神戸の長田区御屋敷通3丁目にある山陽電鉄本社前には椎名麟三『美しい女』文学碑は、椎名が18歳のとき、宇治川電鉄（現・山陽電鉄）に入社し、車掌を勤めた体験から書かれた代表作による。

(1) 故郷と生家

椎名麟三は明治44（1911）年、母「みすの」の実家、兵庫県飾磨郡曾左村書写（現・姫路市書写東坂）で出生した。父大坪熊次は東坂と同じ書写山山麓の隣村、置塩村出身で大阪で警察官をしていたが、後に商社の秘書課に勤務



し、当初、羽振りがよかった。その証拠に東村の鎮守社「八王子神社」の入口鳥居横の袖玉垣に大阪・大坪熊次の名前が見える。同人誌「姫路文学」の同人、田摩新『書写恋しや 夢前夢後』「椎名麟三の家」保存をめざして―によると、椎名麟三の生家は現存し、文学碑もある。書写山六参道（東坂、西坂、六角坂、刀出坂、鯉尾坂、置塩坂）の一つ「東坂参道」近くの「女人堂」の階段横にある。「女人堂」とは明治維新まで書写山「円教寺」は女人禁制の山だった。そのため女性は「女人堂」に御札を納めて遙拝した。下の写真の左手の家屋が生家。石段上が「女人堂」だ。



建物の外観は、このあたりの農家とは違う造りで、「女人堂」の石段に沿ってL字形をしていて、瓦屋根は重厚な日本瓦でなくモダンだったと田摩氏はいうが、その面影を今は感じない。しかし玄関の軒先は昔の巡查派出所的デザインをうかがわせると野元は思う。椎名の家族が去ってから書写山の僧侶が長く住んでいたようだが、現在は空き屋だ。田摩は保存に奔走しているが成功していない。

(2) 椎名麟三と姫路・書写山

椎名麟三の両親は同じ書写山麓の隣村同士だったが、麟三は小学3年生から旧制中学3年生（村でただ一人名門旧制姫路中学に入学）の少年期の終焉まで書写山山麓の村で過ごした。

エッセイ『猫背の散歩』の中の「竹箒」で、父熊次の女癖の悪さに起因する母「すみ」の「が、出刃包丁を振りかざして父と大格闘するなど母のヒステリーの様子が書かれている。同様に『自由の彼方で』や『猫背の散歩』等によると、麟三母子の生活は父の仕送りも途絶え、貧しかった。13歳のとき、旧制姫路中学校を中退し、母のもとを離れて大阪の父と同居するが、14歳のとき出奔し、野宿、天王寺の無料宿泊所、商店の小僧、出前持ち、コック見習いなど多様な職についた。『自由の彼方で』では大阪中里のレストランや太陽軒というカフェで働く彼とおぼしき少年が何かあると、ガラスを頭で割るという血だらけの、ともすると死に繋がる荒行で逆境をくぐり抜け、また好意をもった女の生き様を見るにつれて、「女」への冷たい思いが次第に形成されていく。それは母のヒステリーと奔放な性も原因として大きく関わっているようだ。暗く苦しい、閉塞生活だが、『自由の彼方で』や『猫背の散歩』だけでなく、彼の代表作『美しい女』にも書かれているよう

(3) 作品の背景

彼の自伝的告白小説『自由の彼方で』や『猫背の散歩』等によると、麟三母子の生活は父の仕送りも途絶え、貧しかった。13歳のとき、旧制姫路中学校を中退し、母のもとを離れて大阪の父と同居するが、14歳のとき出奔し、野宿、天王寺の無料宿泊所、商店の小僧、出前持ち、コック見習いなど多様な職についた。『自由の彼方で』では大阪中里のレストラン



る。同じエッセイの「岩」の書き出しは、「私は、小さいときよくその山に上った。書写山と云って、その頂上に円教寺という大きな伽藍があり、西国の札所の一つになっている。私の村は、その

東の登り口にあたるので東坂本と呼ばれていたが、西坂よりはるかに急であった。」とある。田摩新が奔走して出来た書写ロープウェイ山上駅にある「椎名麟三文学碑」は、彼が書写山麓で生まれたことを顕彰するため昭和25（1950）年に建立された文学碑だ。碑文は「言葉のいのちは愛である」。書は後述するが、親交のあった岡本太郎。言葉は踊り跳ねていた。なかなか味のある字だ。

椎名麟三の少年時代は暗い日々であったこ

『自由の彼方で』では大阪中里のレストランや太陽軒というカフェで働く彼とおぼしき少年が何かあると、ガラスを頭で割るという血だらけの、ともすると死に繋がる荒行で逆境をくぐり抜け、また好意をもった女の生き様を見るにつれて、「女」への冷たい思いが次第に形成されていく。それは母のヒステリーと奔放な性も原因として大きく関わっているようだ。暗く苦しい、閉塞生活だが、『自由の彼方で』や『猫背の散歩』だけでなく、彼の代表作『美しい女』にも書かれているよう

に昭和4（1929）年母の須磨の海への入水自殺未遂をきっかけに彼は宇治川電気の電鉄部（現・山陽電鉄）時代、その過酷な勤務から共産党員として労働運動に目覚めていく。このころ、戯曲『円教寺炎上』を書く。神戸での活動は次第に特高に追い詰められ、上京。やがて昭和6（1931）年、ついに東京・高輪署に検挙され、神戸に護送された。

彼は昭和8（1933）年、獄中で読んだニーチェの『この人を見よ』がきっかけとなってついに転向、刑務所を出所する。また、ドストエフスキーの『悪霊』を読んで開眼、文学を強く志した。

戦後、『深夜の酒宴』で作家としてデビューした。さらにドストエフスキーからキリスト教に入信し、キリスト教作家として活動する。一方、昭和23（1948）年画家岡本太郎が「芸術は一つの運動でなければならぬ」と提唱した「夜の会」に花田清輝、野間宏、埴谷雄高、安部公房らと参加した。岡本のテーマは絵とか文学とか狭い意識にとらわれない新しい芸術を創り出さなければならないという主張だった。（つづく）